CSCL Research Winter Meeting 2000：情報化の中の教師たち

1.About reflection in Teacher Education

～秋田喜代美「実践の創造と同僚関係」～

rep. IMAI,Ako

□はじめに

この文献は二つの問題提起を行っている。

１、日々繰り返されるルーティンとしての教職の価値の問い直しと意見の発見はどのようになしうるのだろうか？

２、専門家の集まりとしての教師文化がどのように実現されうるのか、何がそれをこばむのか？

↓

授業づくりと同僚性に焦点をあてて考える

□同僚性（collegiality）とは

専門職共同体のあり方を捉える概念。

教師は職場に関わる多様な同僚集団に属しているが、そこでの専門職としての対等な成員関係の質を示すのに用いる言葉である。

□学校での教師をとりまく現状

・周辺的な業務の量の増加が、それを効率的にこなすために教師間での分業化、孤立化や小グループ化をもたらす。

→各々の教師の責任が局在化しており、他の教師が問題を共有して口を挟む余地が減り、課題が無難に処理されて行く構造がつくられてきている。

・教師集団内では足並みをそろえること、事を荒たてない形での同調・同質性がもとめられやすい。

→他者から学ぶ可能性と同時に、保守的な関係に縛られて自己を発揮する場を失う関係性を作り出す。

□ハーグリーブズの「教師文化の型」（本文 P238，図１参照）

ハーグリーブスは教師文化の型を５つに分類している。

1．　個人主義型

外部からの干渉が守られる代わりに、教師個々人が孤立している（発達の契機少）

2．　諸グループ独立分割型（バルカン諸国型）

各々のグループが独立し、それぞれの成員は特定の下位集団に愛着、忠誠をもち、下位集団の一員としての教師のアイデンティティを形成する

3．　協働的（collaborative）文化型

互いに信頼し、共に仕事をし、家族的で打ち解けあっている（仕事のパターン化、マンネリ化、親分肌的なリーダーシップを内包する可能性あり）

4．　設計された同僚性型

職権によって階層的な同僚性が意図的に作り出される（過程より結果が志向され重視される）

5．　自在に動くモザイク型

同僚性を基盤にした教師文化のあり方

プログラム化された形ではなく、プロジェクトのような形で、その時々の目的や必要に応じて、力動的に集団のあり方が変化し、さまざまな形で教師同士が互いにつながりあうというあり方

＊彼は教師の自発性によって自然発生的に生まれる同僚性を基礎とする教師文化（タイプ５）をポストモダンの道として提案している。

□日本の教師文化

・タイプ１から４の型が多くみられる

→教師の自己統制感を奪い、アイデンティティ喪失の危機をもたらしている

・心ある教師たちのインフォーマルなネットワーク

→教師の専門職としての価値や意味の発見が生まれる

＊専門職としての教職と他の職業との相違点

・計画や省察での話し合いを重視する点

・一人一人が対等に自立した専門職として計画し省察する点

⇒タイプ５への教師文化の移行には、教師文化の中で教師相互の信念・志向性等や教師同士のやりとりを媒介する道具がどのように生まれ共有され使用されてきているのかという**微視的な観点から、同僚性の構築を考えていくこと**が必要

□実践についての談話と省察にみる同僚性

（１）授業におけるできごとと課題の発見

例：小学校の教師を中心に行われているインフォーマルな国語の研究会の事例

＊授業の具体が引き出すもの：実践的思考様式

日々の教室での営みの中で埋もれていたもの、存在するのに見えなかったものへの新たな気づきが生まれ、実践を捉える眼という実践的思考様式が培われていく

＊経験教師の役割：問いの学び

経験教師が若い教師の授業を通して自らの経験を振り返り、授業において如何なる問題が問うに値するのかという「問いを学ぶ」という真正の「学問」が、授業への省察の中で実践されている

＊授業を語る言葉と語らない状況

授業を語る言葉とは…

授業の特徴をまとめたりする際に使われる準抽象的化する働きを持った比喩的言葉であり、からだをくぐって生まれてきた言葉のこと。

（例）耕し、種蒔き、しかけ等

語らない状況とは…
・発言された内容を理解し次の発言について考えているための沈黙
・意図を持って語らない沈黙
- 語らないことで疑問や異議を暗黙に示している
- ある発言の内容自体はわかり反対意見ではないが知識や経験として共有できない
- 議論が抽象的になったり、教育学等の専門用語が使用される

＊授業の省察に用いる道具：ビデオ、文字記録
文字記録のよさ：授業の時間的流れに流されずに個々の動きを読み、意味を与えやすくなる点
⇒省察に用いられる道具だては同僚性を形成し実践的見識を培う教師文化の文化的道具となる

□教師としての＜私＞を語ること

研究会で自己を語ると同時に、他者が自分を語ってくれること、また同僚が他の教師について語るのを聞くことは、1時間の授業の見直しといった視点とは異なり、教師としての自己の存在の省察となる。言いかえるならば、プロジェクト等を通して、教師としての自己を認識し、日々の授業の中から出来事と自分の課題が発見されてくることの意味やおもしろさを共有し、そこに専門職としての価値と同僚の文化が形成されていく。

□職人モデルから同僚性コミュニティモデルへ

今までの教師モデル：職人モデル＝優れた実践的な技を自ら鍛え上げていく教師像
これから：教師が教師としての自己の存在の危機を乗り越え、コミュニティにおいて各々独自の道を歩んでいく
⇒エンゲストロームの活動システムの考えを参考に、教師活動の創造を考え、同僚性コミュニティモデルをふまえて図示したものが本文 P257 図２である。

□結論

＊教師同士が閉じた固定的な関係にならないためには
異質な文化を常に受け入れ、自分のまわりの社会を意識することが必要であり、そのために、さまざまな専門文化を担った人との関係性を教師の実践の創造活動の中で作り出していくことが必要
＊筆者の考える同僚性とは
職場や地位が同じという限定的意味ではなく、学びへの展望とその探究の過程を共有するコミュニティの仲間
＊同僚性の契機を支えるものは
教師によって生み出され育てられてきた実践づくりや、検討のための教師文化固有の道具

近年、多様な媒介する道具が教師の同僚性を生んでおり、これが制約を超える糸口の一つになるのでないだろうか　例：インターネット、学習会、談話広場　等